

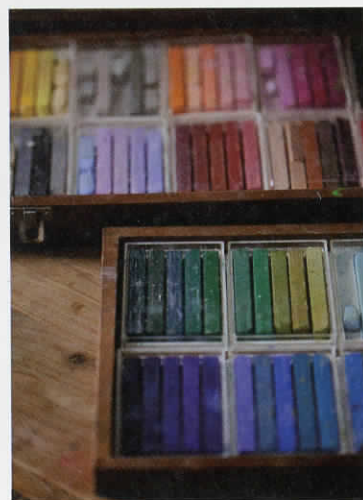


四季折々に手掛ける両口屋是清の棹菓子の掛け紙。齋さんの掛け紙コレクター もおられるとか。



上／日本画の道具。齋さんは描くときは正座。左・下／オイルパステル。他にも水彩絵の具や色鉛筆など、作品によって使い分ける。「マチエール(質感)にはこだわっています。人は色を見ているようで、質感を見ているんです」

両口屋是清の銘菓「おとぎ山」の箱の絵。白鉛の柔らかい菓자에合わせた、心温まる風景。「人は“温かい”という気持ちの次に“甘いもの”を求めますよね」



でも、生まれた場所は変わらない。田畑で働く祖母の姿や、毎日列車を運転していた国鉄機関士の父、そんな僕の家族の風景が、幼い頃の何の不安もない満ち足りた感覚と共に浮かびました。それを素直に描けばいいのだと思えた瞬間、何かが音を立てて弾けたのです。

1998年、画風を変えたひとつめの作品が、「ふるさとの風景展」で最優秀賞を受賞。僕の絵を待ち望む人が、少しずつ増えてきました。両口屋是清から依頼を受けたのは、その後間もなくのことです。

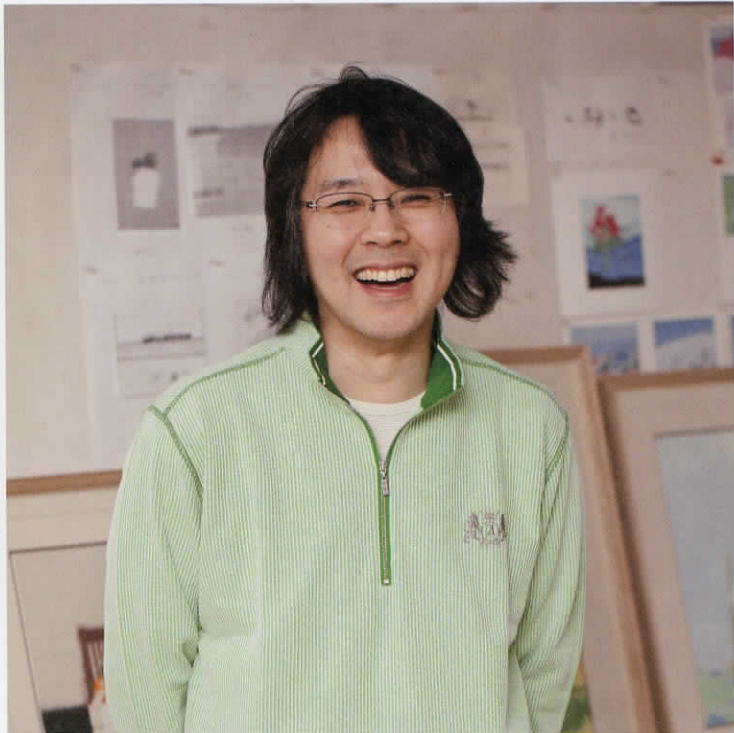
「どこまで削ぎ落し、どこまで伝えられるのか」。抽象的な和菓子の表現は、画家にとって勉強になります。和菓子と共にある絵を描くときには、菓子から広がる想像を膨らませる手伝いをしたいという思いで筆を進めます。

僕は、「絵描きは手で見ると」という信条のもと、デッサンで日常の記憶を残します。数にしてスケッチブックが300冊以上。移りゆくものにとり残されないよう、感性をとどまらせず、いつもニュートラルな状態にいるようにしています。ただ、和菓子職人がお菓子を作るためだけに描いた線にはかなわない。その道を究めた線というのは、本当に美しいと思います。

最近、日本画に造詣が深い人から「僕らの作品は新しい」と言われるようになりました。「古いものより少し違う味」が、ようやく出てきたのかもしれません。



日本画の顔料。色を作るには、すり鉢で顔料を砕き、膠(にかわ)で溶く。会得するまでに何年もかかる技。



さいまさき ● 1966年福島県生まれ、名古屋市在住。東京藝術大学大学院美術学部絵画科日本画専攻修了。2003年、幼少期の記憶の残像(残滓)を描いた「残滓牧景」シリーズで、日本画としてはじめて昭和会賞受賞。受賞歴多。5月8日(水)～14日(火)に小個展「齋正機デッサン展」を松坂屋名古屋本店にて開催。



作品の基になるデッサン。日々の発見を忘れずに描き残す。

残滓^{せんし}牧景^{ぼくけい}—普遍的で 時世^{ときよ}を超える情感^{じかん}—を映す

日本画家

齋正機

予備校の美術講師として、名古屋に越してきたのは18年前。縁あって2004年から、両口屋は清の箱の掛け紙などの絵を描いています。古いようで新しい、新しいようで古い。そういう感覚が、両口屋は清の菓子と僕の絵に共通する印象でしょうか。

僕は福島の果樹園地帯に生まれ、舗装道路もないような片田舎で育ちました。その後、東京藝術大学の日本画専攻に入学。最初は新しい作風を創りたいと、鼻っ柱強く、抽象的な絵を描き続けていました。ところが、だんだんと追い詰められてくる。今思うと、単に新しいだけでは世間とは一致しないですね。

転機は32歳。もう一度、ゼロに戻って作品と向き合おうとしたときに、どうしても捨てられないものが見えてきました。それは、生まれた場所—故郷—の風景です。どんなに知識や技術を身につけても、どこで何をしたい